

東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学研究情報センター

平成24年度事業報告

平成25年6月

## 目 次

1. センター概要	2
2. 教員	3
3. 委員会等	3
4. プロジェクト事業	4
1) 公募プロジェクト	4
2) センター機関推進プロジェクト	9
○重点プロジェクト	10
○一般プロジェクト	20
5. アジア・アフリカ学術基盤形成事業	21
6. 研究成果の公開・発信事業	24
7. 研修事業	25
8. その他	26

# 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター

## 1. センター概要

東洋学研究情報センター（Research and Information Center for Asian Studies、以下、センターと略）は、東洋学文献センター（昭和 41 年設置）に代わる東洋文化研究所の附属施設として、平成 11 年 4 月 1 日に新設された。センターは、研究所が行うアジアに関する先端的な研究と連動し、またその成果を踏まえながら、アジア全域を対象とする「アジア資料学」の確立を目指している。具体的には、「アジア地域の人文・社会科学（文献・造形資料、現代的諸課題）に関する資料・情報の収集・研究とその情報化」に関する事業を担っている。

センターの研究分野は、造形資料学分野、比較文献資料学分野及び平成 21 年度から増設されたアジア社会・情報分野の 3 つに分かれる。

造形資料学分野は、美術作品・建築・考古資料・民族学資料・地図・挿絵・映像・写真等の非文字資料を、比較文献資料学分野は、アジア諸言語で書かれた書籍、新聞雑誌、文書、碑文等の文字資料を、アジア社会・情報分野は、アジア・バロメーターなどのデジタル化された社会調査資料を主な研究対象とする。センターの教員スタッフは、造形資料学分野担当の教授 2、比較文献資料学分野担当の教授 1・准教授 1、アジア社会・情報分野担当の教授 2 からなる。

平成 15 年度から、新たに外部資金を戦略的に投入することによって事業の拡大・充実を行い、さらに、文部科学省科研費などにより実施された一般プロジェクトとも連動して、包括的な内容を持つアジア資料学の構築を目指した事業を実施するようになった。現在では、これらは機関推進プロジェクトとして継続的に実施されている。

平成 21 年 6 月には、文部科学大臣によって共同利用・共同研究拠点に認定され、翌平成 22 年度から全国の関連研究者コミュニティに対しより開かれたセンターとしての活動を開始した。共同研究は上記の 3 分野にまたがって公募され、学内外の委員からなる運営委員会での審議によって選抜・評価されている。

文献資料とデータベースはこれまでも広く国内外の研究者・学生に公開し利用されてきたが、それ以外の研究資源も含めた使いやすい公開方法の整備、より高次元なアジア研究データベース開発を通じ、研究者コミュニティや社会の要望に応え、新しい共同研究に発展しうるような共同利用の実現を目指している。

平成 21 年度には、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業に「アジア比較社会研究のフロンティア」が採択され、アジア社会・情報分野を中心に 3 年計画での最終年度が終了し、大きな成果を得た。

## 2. 教員

センター長	教授	大木 康
副センター長	教授	園田 茂人
	教授	梶屋 友子
	教授	松田 康博
	教授	板倉 聖哲
	准教授	名和 克郎

## 3. 委員会等

### 1) センター運営委員会

開催日 平成24年6月13日(水) 16:00～

平成25年2月 4日(月) 15:00～

#### 運営委員会委員

大木 康	東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター長
園田 茂人	東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター 副センター長 アジア社会・情報分野・教授
池本 幸生	東京大学東洋文化研究所汎アジア部門・教授
大西 克也	東京大学大学院人文社会系研究科・教授
村田 雄二郎	東京大学大学院総合文化研究科・教授
加藤 博	一橋大学大学院経済学研究科・特任教授
小長谷 有紀	人間文化研究機構・国立民族学博物館民族社会研究部・教授
岩井 茂樹	京都大学人文科学研究所人文学研究部・教授
宮治 昭	龍谷大学文学部・教授
宮 篤博史	成均館大学校東アジア学術院(韓国・ソウル)・教授
柳澤 悠	東京大学名誉教授

## 2) センター委員会

### 開催日

平成24年 4月24日(火) 14:30～  
平成24年 5月22日(火) 14:30～  
平成24年 7月 3日(火) 14:30～  
平成24年10月 2日(火) 14:30～  
平成24年11月 6日(火) 14:30～  
平成24年12月 4日(火) 14:30～  
平成25年 1月15日(火) 14:30～  
平成25年 2月12日(火) 14:30～  
平成25年 3月 5日(火) 14:30～

### センター委員会委員

園 田 茂 人	アジア社会・情報分野、委員長
榊 屋 友 子	造形資料学分野
板 倉 聖 哲	造形資料学分野
大 木 康	比較文献資料学分野
名 和 克 郎	比較文献資料学分野
松 田 康 博	アジア社会・情報分野

## 4. プロジェクト事業

### 1) 公募プロジェクト

センターに蓄積されてきたアジアのデータベースを含む諸資料、人的ネットワーク、施設を活用し、アジア各地に関する多様な情報を、時間軸、空間軸に沿って比較・俯瞰し、アジアと世界の新しい理解方法を提案するための共同研究を募集し、実施している。

#### 1.課題名：関野貞による東アジア文化財写真の整理と分析

研究者

東京大学大学院工学系研究科・教授 藤井恵介（申請者）

東京大学大学院工学系研究科・技術専門職員 角田真弓

東洋文化研究所東アジア第一研究部門・教授 平勢隆郎

東洋文化研究所画像技術室・技術専門職員 野久保雅嗣

研究期間：2年計画2年目（平成23～24年度）

#### ◆全体計画

東京大学東洋文化研究所には、戦前関野貞による中国大陸調査に関わる写真資料が大量に存在する。アルバムに整理されたものだけでも3019点を数える。これらは、現在人間文化研究機構と東洋文化研究所が共同で実施している「近代日本文化財保護政策関係在外資料の調査と研究」による整理が進んでいる。これに対し、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻にも、大量の関野貞による中国大陸の文化財を撮影した写真資料が存在する。キャビネ版焼付けが約1000点、ガラス乾板が約4000点ある。ガラス乾板は、上記の共同研究においてデジタル化を進めつつある。

ところが、いわゆるネガの形で存在する古写真資料は、デジタル化を進めると同時に、焼付け写真の状態では情報を確定し、長期保存に耐えるようにする必要がある。そして、それを研究者に提供し得る形にしておくのが、本来のあり方である。

そこで、本研究は、上記共同研究と連携しながら、整理の成果を焼き付け写真と関連づけて、その分析を進めるものである。

※最終研究成果については、センターHPで公開予定 <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

## 2.課題名：新しいアジア像構築の試み：アジア・バロメーターの再分析プロジェクト

### 研究者

東京大学大学院経済学研究科ものづくり経営センター・特任助教 岸保行（申請者）

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・助教 鴨川明子

ハワイ大学マノア校社会学部・准教授 中嶋聖雄

中央研究院社会学研究所・助研究員 李宗榮

東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター・副センター長、教授 園田茂人

研究期間：2年計画2年目（平成23～24年度）

### ◆全体計画

東洋学研究情報センターでは、猪口孝教授を中心に、2003年から2008年までの6年間、アジア・バロメーターという名のアジア全域（東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジア）を対象とした調査を実施してきた。2009年度には、各年度で異なるスキームで実施されたデータが統合データファイルとしてまとめられ、徐々に、このデータをもとにした仮説検証型の実証研究が進められつつある。もっとも、これらのほとんどは従来のディシプリンの思考枠組みにとらわれており、アジア研究の新地平を切り開くには至っていない。そこで本プロジェクトでは、従来、アジアを語る際に用いられてきたいくつかの理論的・理念的枠組みを脱／再構築することを試みる。

たとえば、1980年代後半の儒教資本主義論が華やかなりし頃、東アジアにおける発展の説明原理として「集団主義」「教育重視」「就労重視」「家族主義」といったいくつかのキーワードが用いられてきたが、これらが実証的に検討されてきたとはいえない。その点、アジア・バロメーターには、これらの概念を操作的に定義した質問群が複数時点で用意されているため、これらの変数を軸にした時系列的・比較横断的分析が可能となっている。経済（岸）、教育（鴨川）、文化（中嶋）、政治（李）、比較（園田）といったキーワードで研究を進めている研究者を糾合し、従来アジアを語る際に用いられてきた概念を実証的に検討するとともに、アジア諸国のグルーピングを行い、これらの理論枠組みの射程を検討したい。

※最終研究成果については、センターHPで公開予定 <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

### 3.課題名：日本漢籍集散の文化史的研究－「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み－

研究者

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫・准教授 住吉 朋彦（申請者）

京都大学人文科学研究所・教授 金 文京

慶応義塾大学文学部・教授 佐藤 道生

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫・教授 高橋 智

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫・教授 堀川 貴司

国文学研究資料館・准教授 陳 捷

国立歴史民俗博物館・准教授 小倉 慈司

東京大学東洋文化研究所東アジア第二研究部門・教授 大木 康

研究期間：2年計画1年目（平成24～25年度）

#### ◆全体計画

本研究では宮内庁書陵部に収蔵する「図書寮文庫」中の漢籍を対象とし、日本伝来漢籍（以下「日本漢籍」と簡称）を要素とする蔵書群の形成と変転の過程を確かめ、蔵書研究の視点に立って、個別の伝本の文化史的意義を捉え直し、日本文化形成に対する日本漢籍の寄与を明らかにする。

図書寮文庫は、書陵部収蔵資料中の、公文書を除いた図書群であり、従来書陵部本と称する範囲にほぼ等しい。その中には公武の伝世資料を含み、特に江戸幕府紅葉山文庫本から明治期に抜き出された善本群には、中世以来の金沢文庫本、東福寺普門院蔵書といった、日本漢籍史上、最重要の蔵書に由来する資料を含む他、近世の江戸幕府や、高知山内家、徳山毛利家、佐伯毛利家等の好学の大名、幕府儒官の古賀家献納資料に、御所や宮家、公家の伝本をも加え、日本漢籍史の屋台骨と見るべき、複合的蔵書群である。

図書寮文庫本の書誌学的研究は目録解題の整備を中心に行われてきたが、1953年に刊行された『和漢図書分類目録』より68年を経て、各方面の研究も進捗し、内外の資料との比較研究の便宜は格段に向上した。そこでこの度は、伝本に対する基礎認識の再検討から始め、伝来過程とその脈絡に重点を置いた調査を加え、蔵書史という視座から、その意義を文化史的に総合することを課題とする。



#### 4.チベット美術の情報プラットフォームの構築と公開

研究者

金沢大学・教授 森 雅秀（申請者）

金沢大学・准教授 高田 良宏

高野山大学・教授 乾 仁志

鶴見大学・教授 矢島 道彦

東京外国語大学・教授 高島 淳

人文情報学研究所・所長 永崎 研宣

人文情報学研究所・研究員 苫米地 等流

東京大学東洋文化研究所南アジア研究部門・教授 永ノ尾 信悟

東京大学東洋文化研究所南アジア研究部門・准教授 馬場 紀寿

研究期間：2年計画1年目（平成24～25年度）

##### ◆全体計画

東洋学、さらには人文学における非文献リポジトリ開発のモデルケースとして、仏教美術を中心としたチベット美術の情報プラットフォームの整備と公開を行う。わが国の諸研究機関に所蔵されているチベット美術の画像データを整理・統合し、インターネット上で公開するための統一的フォーマットを開発する。チベット美術の主要なジャンルである絵画、彫刻、工芸、壁画、建築などに関する画像データを中心に、作品そのものの基礎的情報、関連するテキストの文字情報、書誌情報、地理的情報などをリンクさせ、全体を一元的に扱う情報プラットフォームを構築し、非文献リポジトリの国際的な標準としての普及をはかる。画像資料を中心に仏教学、美術史、建築史学、民俗学、宗教学、歴史学などのさまざまな分野の成果を統合することで、総合的なチベット仏教美術の研究基盤を確立させるとともに、人文科学における情報の整理、統合、発信にかかわる基本的なモデルを提供する。さらに、国内の大学に附置されているインド学仏教学関係の研究機関を横断的に連携させることで、それぞれが所有する貴重な研究資料やデータの共有と有効な活用、設備・備品の効果的な導入、人材の活用や合理化を進め、さまざまな分野での連携・活性化を将来的に可能とする。

2) センター機関推進プロジェクト

研究情報の収集，資料整理やデータベースの構築とその公開に関わるプロジェクトを所内で募集し，実施している。

重点プロジェクト……センター予算によって重点的に実施するもの。

一般プロジェクト……センター予算外から予算措置を講じて実施するもの。

平成 24 年度センター機関推進プロジェクト一覧

	No.	分野	申請者	プロジェクト名	継続期間
重点	1	文献	丘山/小寺	漢籍知識庫の構築と国際共同運用への試み	継続(3-3)
	2	文献	松田	台湾現代史貴重史料の収集・整理	継続(3-3)
	3	文献	名和	日ネ協会旧蔵資料データベース構築	継続(3-3)
	4	造形	小川	アジア美術画像アーカイヴ(第3期)	継続(2-2)
	5	造形	板倉	東アジア絵画デジタル・アーカイヴ・プロジェクト	継続(3-3)
	6	造形	平勢	東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化	新規(1-1)
	7	社会情報	園田	アジアバロメーターによる先導的アジア比較研究の刊行事業	新規(2-2)
	8	文献、社会情報	安富	社会生態史学のためのデータベース構築	新規(3-3)
一般	1	造形	榊屋	イスラーム美術・建築作品の画像・情報アーカイヴ	継続(5-4)

## 重点プロジェクト

### 1. 漢籍知識庫の構築と国際共同運用への試み（3年計画3年目）／小寺 [文献]

#### ◆今年度の成果

平成24年度は、申請計画に沿って行われ、成果は下記の通り。

#### 1) 『碧巖録（一夜本）』画像デジタルアーカイブス

○標題原本の画像全影公開（所内）完了。

○解説文等については班研究「中国禅宗語録の研究」メンバーによる提供を予定していたが、検討の結果、原本の作成時期および影印の正確さから著作物としての権利は存在しえないとしても、なお何らかの権利問題が生じうるとの慎重な意見が出され、見送られた。

#### 2) 倉石武四郎博士講義ノートデジタルアーカイブス

○約5370頁の全画像公開完了。（蔵書印入）

○全文検索機能付き画像公開サイト作成

<http://kuraishi.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

○全39タイトルのうち、36タイトル分の画像・9タイトルのテキスト全文公開。  
760,516字（約（暫定的）1900頁）

○原本の保存のため、中性紙の箱などに整理して収納。

#### 3) 「四庫全書綜目提要」の内容を漢籍目録データベースに拡張機能として加える件

○綜目提要の入力は完了。

#### 4) 中国国家図書館と漢籍に関する共同研究、台湾国家図書館との

国際共同漢籍目録データベース

○昨年度までに、中国国家図書館と、相互対等の条件で協力協定を結び、その第一弾として東文研の善本画像データを国家図書館に提供し、国家図書館のサーバで公開したが、今年度は進捗なし。

#### 5) 東洋文化研究所所蔵漢籍 電子画像作成（カラー撮影）

○『説文解字十五卷 同治十一年武昌崇文書局重刊本』（倉石：10425）【貴重】

この資料には非常に多くの書き込みがあるが、現在公開されている善本画像では、元となったマイクロの画質の問題から書き込みが判読できない。また大変痛みが激しいため、急遽再撮影を行い、書き込みを判読可能な高画質な画像の提供と保存を兼ねた。

これにより、閲覧者は原本に当たる必要が基本的になくなった

## ◆全体計画

申請者は、これまで長年にわたり台湾現代史貴重史料を私費で収集してきた。東文研に移ってからは個人研究費などを使って収集を継続した。これらの史料の多くは台湾の図書館を含めて、どこにも公開されていない貴重なものである（流出した政府の機密文書を含む）。ただし、従来は個人的努力に依存しており、高価だったため、貴重資料の収集のチャンスを逃したこともあった。こうした貴重資料の収集をプロジェクトとして予算化し、より系統的・機動的な収集と整理を行うこととしたのが本プロジェクトの趣旨である。

## ◆今年度の進捗状況

平成25年3月現在、所定の予算と部門基盤構築費を併せ、古書と檔案等を合わせて以下の収集が済んでいる。今年度も資料の整理のための予算が確保できず、全額資料購入に充てた。このため、予算外で昨年度までの資料と併せてエクセルファイルへの書誌情報の入力を進めている。

## ①古書

資料名
鬥智新論
中国国民党歴次全国代表大会宣言集
空協訓（200）正科班課程
無産階級專政之批判
中国之電信事業
韓戦之教訓
China Handbook 1944
「八・一四」抗日空戦勝利六十周年紀念文集
中日滄桑録
空軍軍官学校第七期同学及眷属狀況冊
美蘇航空器識別
金門慶祝古寧頭大捷卅週年專刊
動員時期電信（子）器材管制弁法暨實施規定
国防部動員幹部訓練班學員結業手冊
国防部情報幹部訓練班畢業証書
戦闘與建設（第5巻第1期）
一九八六年中共交通建設研析

中国外交（1996年版）
我們為什麼反對費正清
中華戰略学会大陸研究会會員論文專集（五）
柔性攻勢的綜合研究報告
大陸匪情事實與報導英文双周刊中文稿（第2卷第15期）
中華戰略学会第六次會員大会中心議題資料
我這一輩子
堅持民族大義戰勝一切敵人
研究論文專集（四）
勝利成功之路
共党民主集中制之批判
共党理論批判
中共政治發展
知識分子的心聲
莊敬自強破敵勝敵
中共十年經改革的理論與實踐
中共建政五十年
兩岸關係大事紀（民國八十年）
機密檔案
偉大的登陸
為民主而奉獻為理想而奮鬥
「十三大」後的中共：人事重組與政策方向
復興基地建設與中國大陸實況比較研究
徐搏九文集
台灣政治風雲
中国研究的規範認識危機
中共徘徊在十字路口
反共義士專輯（第三集）
中華民國国防研究院
鄧小平改革路線研究
中国国民党史
万里萍踪
中共的權力鬥爭與路線鬥爭
從秘密談判到共赴國難
中日戰爭史略（二）

美国戰略導彈防禦計畫的動因
莒光講習班教材
新漢奸來龍去脈
在苦難磨練中更能踴躍歡騰
如何健全思想與組織
如何戰勝敵人
当前世局與國家前途
蔣副院長講詞（一）
蔣副院長講詞（二）
台灣與大陸
台灣與大陸參考資料
總裁訓詞：我們國家敵立場和國民的精神
國際形勢分析
如何在思想戰線上戰勝敵人
如何在組織戰線上戰勝敵人
如何在組織戰線上戰勝敵人（表解）
如何在軍事戰線上戰勝敵人
班主任賴上將講詞（二）
如何健全自己
勝利的歷程
後備軍人管理與組訓
台灣經濟建設展望
國民革命經驗教訓
建軍備戰的實務
反共鬭爭報告（組織戰線）展望
大樹浮生錄
回顧錄：愛槐堂文集
國軍軍語辭典
苦心孤詣堅苦卓絕
涂庭瑤將軍紀念集
覺民文集
沈覲鼎文存
中國戰爭大辭典
冒險犯難記（上）
冒險犯難記（下）
戎馬五十年

錢大鈞上将八十自伝
墨三九十自述
第二次中日戦争各重要戦役史料彙編：東北義勇軍
今日新聞文摘版（第1巻第4期）
中華航業海員党部四十六年度重要工作概況等
精忠報（四部）
我国與隣接国家之国界問題：西伯利亞與中亜細亜部份
余生録憶
Annual Pictorial Magazine of the Flying Tigers of the 14 <sup>th</sup> Air Force Association 1987
中国国民党與中国現代化

② 檔案・書簡

資料名
(檔案) 華興專案
(檔案) 成天專案

③ ビラ

資料名
共匪又綏遠新疆出売給俄国人了
参加反共陣營的三項保証
中華民國国防部印頒安全証

④ 年表類

資料名
俄帝侵華史表解
国民革命軍歴史表解
国父年表

◆ 具体的な成果物

3年間で収集した資料および個人でそれまでに収集した貴重な資料のうち、すでに約9割をエクセルファイルに入力し、東洋文化研究所図書室に納入済みである。資料群の名称は「現代台湾文庫」(Contemporary Taiwan Collection)となる予定である。未入力の図書・雑誌・ビラ類等に関しては、今年度内に整理・入力し、納入する予定である。これらは図書室で、整理・登録などが済み次第、平成25年4月以降に順次公開される予定である。なお、檔案に関しては、整理・入力に大変な時間がかかることが判明し、図書室と相談の上進めているものの、平成25年度にまたがる可能性が高い。檔案資料は全体から見ると僅かな割合しかないが、

資料的価値が非常に高いため、平成 25 年度のできるだけ早い時期に公開できるよう、細目の入力作業を速めたいと考えている。なお、平成 25 年度の「中華圏現代史貴重史料の収集・整理」プロジェクトが採用された場合、将来その収集の成果とともに、『東洋学研究情報センター叢刊』にまとめて公表するか、あるいは簡易版の「現代台湾文庫目録」を東洋文化研究所のホームページに公表するなどして、宣伝広報を行う予定である。

### 3. 日ネ協会旧蔵資料データベース構築 (3 年計画 3 年目) / 名和 [文献]

#### ◆全体計画

社団法人日本ネパール協会の旧蔵資料は、1950 年代から 70 年代初頭、ネパールが近代国家に転換した最初の約 20 年間に主にネパール国内で出版された、法律、統計、国王演説集等から、教育、農学、文学にいたる、ネパール語及び英語の多様な書籍・パンフレット等からなる、貴重なコレクションである。本プロジェクトは、同資料についての基本的なデータベースを作成することを、その目的とする。

#### ◆今年度の実施内容

計画の最終年度にあたる今年度は、第一に、昨年度に作成した書誌情報の確認、修正作業を行い、それを元に冊子体の目録を作成した。目録は資料を文字別、および図書・パンフレット類か雑誌か、により区別した上で、日本ネパール協会の番号順に並べ、東文研図書館の請求記号を付し、場合によっては若干の補足情報を書き加えただけの、簡素なものである。なお、より細かな書誌情報等についての検索は、インターネット上で公開予定の下記データベースで対応すべく、準備を進めている。

第二に、公開可能なものを中心に、資料のスキャンを進めた。日本ネパール協会旧蔵資料は、形状の異なる複数の資料が一つのハードカバーの冊子体にまとめられている場合が多いため、作業には予想以上の時間がかかっている。

第三に、インターネット上での一般公開に向けたデータベースの作成作業を進めた。外部に発注したシステムには、既に昨年度までに作成し今年度修正した書誌データと、一部のスキャンした資料が入れられており、現在データに見られる誤植（主に上記目録の校正段階で発見されたもの）の修正、また、デーヴァナーガリー文字のネパール語は様々な形でローマ字表記が可能であるため、それらに対応するための措置の検討と追加情報の入力、検索のためのキーワードの設定等を進めている。

なお、以上の作業のうち、書誌情報の確認、目録データの校正、資料スキャン等の作業のために、アルバイト 3 名を雇用した。

#### ◆具体的な成果物

刊行された成果物としては、以下のものがある。  
名和克郎（編）『東京大学東洋文化研究所所蔵 社団法人日本ネパール協会旧蔵資料目録 / Catalogue of the Japan-Nepal Society Collection Owned by the Institute for Advanced



Studies on Asia, University of Tokyo』(東洋学研究情報センター叢刊 第15輯、xi+177p、2013年3月)

インターネット上のデータベースに関しては、上記の通り、データの誤植の訂正に加え、特にデーヴァナーガリー文字による資料に関する検索精度を向上させるための措置や、検索キーワードの設定等の作業が完了しておらず、一般公開には至っていない。

また、本プロジェクトによる書誌情報のデータは、書誌情報入時に東文研図書室に提供され、また上記作業により発見されたOPAC上の誤植についても随時お伝えしているため、本プロジェクトは、東文研図書室及び東京大学OPACに対しても若干の貢献をしていることになる。

#### 4. アジア美術画像アーカイブ(第3期)(2年計画2年目) / 小川 [造形]

##### ◆全体計画

東アジア美術研究室では、この60年来、世界の公私コレクションに所蔵される中国絵画の調査・撮影を実施し、写真資料の収集・公開に努めてきた。その結果、資料点数は無慮20万点に及ぶ。これを中核として、さらに東京国立博物館収集東南アジア彫刻スライド資料2万点など、新たな資料を加え、科研費(基盤A・基盤S)とタイアップして、建築分野にもわたる調査・撮影旅行を実施してきた。今プロジェクトもそれを引き継ぎ、総合的なアジア美術画像アーカイブの構築を目指す。

##### ◆今年度の実施内容

『中国絵画総合図録』3編がこの三月から出版される。その準備を鋭意行ったが、参照するための書籍を一部購入した。

##### ◆具体的な成果物

『中国絵画総合図録』3編第1巻 アメリカ・カナダ篇I 2013年3月刊行

#### 5. 東アジア絵画デジタル・アーカイブ・プロジェクト(3年計画3年目) / 板倉 [造形]

##### ◆全体計画

本プロジェクトはこれまで継続して行ってきた中国絵画デジタル・アーカイブ・プロジェクトを基礎として、さらなる発展を目指すものである。アジア美術画像アーカイブ・プロジェクトの中心をなす中国絵画のアーカイブをより充実させるため、科研等で新たに収集した資料を加工・整理し、公開していく。

これまでに公開した「中国絵画所在情報データベース」は国内外のアクセスがあり、世界的にも認知されてきた。又、2010年完成した「東アジア絵画史研究文献目録」も日本の研究を世界に知らせる役目を果たしている。本プロジェクトでは、昨年試験的に掲載した画像を本格的にイントラで公開することを目指し、同時に、新たな画像データベース「幕末期中国絵画所在情報データベース」の作成に取り組む。

◆今年度の進捗状況

具体的な作業としては、昨年・去年に引き続き谷文晁一門の粉本調査を実施、撮影を行うとともに、この機会に参加した多くの研究者と意見交換を行った。その上で「谷文晁派（写山楼）粉本・模本資料データベース」の画像を834件追加公開した。

又、「東アジア絵画史研究文献目録」唐・朝鮮の部分のデータ追加を行った。  
来年度、サントリー美術館の「谷文晁」展に協力、成果の一部が公表される予定。

◆具体的な成果物

「谷文晁派（写山楼）粉本・模本資料データベース」 2011年5月より公開開始  
<http://cpdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/edo/buncho.html>

2012年度、谷文晁DBに追加した画像&データ 834件 (no.589~1422) 合計1422件

「東アジア絵画史研究文献目録」絵画史文献 データ件数(2012年度追加数)

唐（書籍69(+6) 図録51(+1) 論文276(+34)）

朝鮮（書籍112(+9) 図録90(+10) 論文786(+33)）

6. 東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化（1年計画）/平勢

[造形]

◆全体計画

わが研究所には、貴重な美術考古資料が所蔵されている。これらは、機会を得てよりよい保存状況下におくことが求められている。しかし、一方において、物品の劣化の問題が急浮上してきており、それらから他の物品を守る必要も生じている。そこで、目につくところから、保存のための処置を講ずべく、本計画を申請することにした。

◆今年度の実施内容

<1>キャビネットの購入：すでに保管の措置をほどこしたガラス乾板については、仮に配置していた場所がある。それを保管しやすいように再配置した。<2>保存ケースの購入：焼付け写真を保存ケースに格納した。<3>中性紙の購入：上記の保存ケース内の焼付け写真や過去に作られた多数の写真アルバムに貼られた焼付け写真を保護すべく、これを一点一点はさみ込んだ。

◆具体的な成果物

なし。ただし、別に進められたプロジェクトのうち、本整理物品を用いたものについては、個別に公開の予定、公開済みの成果がある。

## 7. アジアバロメーターによる先導的アジア比較研究の刊行事業(2年計画2年目)/園田 [社会情報]

### ◆全体計画

2003年から2008年まで、猪口孝教授を中心に実施されたアジアバロメーターも2010年によろやく全データを収録したデータベースを構築でき、そろそろ、その中から優れたものをえりすぐり、対外的に発信すべきタイミングにある。

他方で、英語による成果報告がなされても、日本人研究者によるデータベース利用が少ないという難点がある。そこで本プロジェクトでは優れた論文を日本語に直し、論文集の形で対外的に公開することを目的としている。

### ◆今年度の進捗状況

今年度の計画書では、「本センターのセンター叢刊のスキームを利用した2冊目の本の刊行を行う」と書いた。実際の作業には、論文の選定と編集、選定論文の翻訳(そのため業者を利用した)とそのリライト(実際の翻訳は使えないものだったため、編者レベルでのリライトが必要だった)が含まれるが、幸い9本の論文を収録することができ、以下のような目次で、センター叢刊第16号として刊行されることになっている。

## リスクの中の東アジア—アジア比較社会研究のフロンティアⅡ

### 序章 リスクの中の東アジア

園田茂人

### 第1部 社会関係とリスク、社会関係の中のリスク

#### 第1章 比較の視点からみたアジアのリスク認識

張 安植

#### 第2章 家計リスク対応としての児童労働—その選択決定要因の東南アジア比較

勢村かおり

#### 第3章 紛争リスクとアジア—軍事支出認識の比較政治学

エイタン・オレン

### 第2部 新自由主義の拡がりというリスク

#### 第4章 東アジアにおける福祉政策の再検討

鄭 力軒・林 宗弘・蕭 新煌

#### 第5章 対抗的グローバル化の誕生?—越境と政治参加の比較社会学

金 知允

#### 第6章 市場経済化の政治リスク—格差拡大をめぐる中印露比較

園田茂人

### 第3部 アジアの社会的紐帯—リスクか、資源か?

#### 第7章 アジアにおける家族主義—その歴史的起源と変化をめぐって

李 宗榮

#### 第8章 義理と人情、どちらが大切?—縁故主義の日米中印比較

岸 保行

#### 第9章 宗教は信頼を生み出すか—マルチレベル分析によるアプローチ

ファビアン・J・フローゼ

### ◆具体的な成果

園田茂人編『リスクの中の東アジア—アジア比較社会研究のフロンティアⅡ』

勁草書房、2013年3月29日発行。

## 8. 社会生態史学のためのデータベース構築（3年計画3年目）／安富 [文献]、[社会情報]

### ◆全体計画

乾燥地に生きる人々の生活を明らかにし、そこでの暮らしが生態系をより豊かにするようなものとなるにはどのようにすべきかを考えるための実践的意義をもつデータベース作りを目指している。そこから生まれる新たなコミュニケーションが更に、データベースを豊かにするような、自律的に成長するシステムがその究極的目標である。

### ◆今年度の進捗状況

今年度は（1）中国山西省における三光作戦の村の老人の聞き取り調査、（2）アラシャン砂漠における生態系を回復させる経済活動を樹立するための研究調査、を中心として推進した。

（1）は大野のり子氏が現地に数年にわたり滞在し、村の老人と心の交流を展開しつつ聞き取り調査を行なっているものである。我々は、その活動を側面支援してきた。既にその成果の一部を、大野のり子編『黄土地上来了日本人—中国山西省三光政策村的記憶—』を東洋学研究情報センター叢刊13として刊行し、今年度はその続編を刊行する予定であったが、尖閣諸島問題をめぐる緊張が山西省農村部で著しく、翻訳者の協力が突然得られなくなり、刊行を見合わせた。そこで、既存の聞き取りデータをデータベースとして提供していくための作業と、膨大な映像資料の整理とを中心に行った。（2）は、富樫智「内蒙古阿拉善砂漠における住民参加型砂漠化防止の研究と実践」を紀要論文として既に発表しており、その成果を更に発展させる活動を展開している。具体的にはオニクという砂漠緑化作物の根に生育する植物を漢方薬原料として利用する事業のビジネス化を中心とした実践的調査を推進している。このなかから「生きた活動のための情報蓄積・生きた活動のための社会生態史学の研究・生きた活動の当事者による研究とデータ蓄積を支援する」という目的が実現されつつある。

### ◆具体的な成果物

深尾葉子・安富歩編『黄土高原・緑を紡ぎだす人々—「緑聖」朱序弼をめぐる動きと語り（東洋文化研究所叢刊 第24輯）』（風響社）、2010年。

大野のり子編『黄土地上来了日本人—中国山西省 三光政策村的記憶—』

東洋学研究情報センター叢刊13、2011年。

富樫智「内蒙古阿拉善砂漠における住民参加型砂漠化防止の研究と実践」

東洋文化研究所紀要、第159冊，pp. 239(122)-286(75)2011年。

## 一般プロジェクト

### 1. イスラーム美術・建築作品の画像・情報アーカイブ（5年計画4年目）／榎屋 [造形]

#### ◆全体計画

世界の様々なコレクションに収められているイスラーム美術作品やイスラーム地域各地に残されたイスラーム時代の建築作品の調査研究を行って収集した画像資料と作品・建築に関する情報や既に蓄積された画像資料を整理・分類・分析することによって、アジアにおいて文化的・国家的自己同一性の追求と形成がいかに美術に即していたかについて、イスラーム地域の事例を供するものである。

#### ◆今年度の進捗状況

フスタート採取のイスラーム陶器片（フーケ・コレクション）について、岡山県倉敷市大原美術館所蔵の作品 409 点を写真撮影、細部観察などを含む調査を完了した。岡山県岡山市立オリエント美術館のアラビア語またはペルシア語銘文入りの作品を調査した。

#### ◆具体的な成果物

インド・イスラーム史跡写真については、センターのホームページで公開中（<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~islamarc/index.html>）。イスラーム・タイルについては、蓄積データ数が少なく、美術館および美術財団所蔵品の画像については著作権の問題があるため、公開形態も含めて検討中である。

大原美術館所蔵のフーケ・コレクション、フスタート採取イスラーム陶器片の一部についての考察・紹介として、『明日の東洋学』28号、『國華』（来年度出版予定）を執筆し、来年度は大原美術館主催のシンポジウムで発表の予定である。

岡山市オリエント美術館の銘文入り作品についての調査・解説・考察の結果は、『銘文に秘められたオリエントの世界』展のキャプションとして活用されたほか、申請者による紹介・解説が図録に掲載された。また、2012年12月に岡山市立オリエント美術館において申請者が関連発表を行った。

## 5. アジア・アフリカ学術基盤形成事業

アジア比較社会研究のフロンティア（3年計画の3年目）

### (a) 研究協力体制の構築状況

申請書に書かれている4つの拠点機関とは、若干濃淡は異なるものの、十分な研究協力体制を作り上げることができた。

台湾の中央研究院とは、この間、毎年共同ワークショップを実施してきたが、来年度以降は、**Political Risk and Human Mobility** というタイトルの共同プロジェクトを進めることとなった。同プロジェクトは、日本側拠点機関の共同利用・共同研究拠点化にともなう公募プロジェクトに採択されたもので、中央研究院の側でもマッチングファンドを準備する予定となっている。この共同プロジェクトでは、韓国やドイツなどの研究機関を巻き込みつつ、比較の視点から中国の大国化を分析しようと考えている。中央研究院側からは、具体的な協力の申し出があるが、これも、本事業の成果とあってよい。

韓国の高麗大学校では、BK（ブレイン・コリア）21の後継プログラムが動いており、リーダーも、本事業のコーディネーターのYoon In-jinからKim Chul-kyuへと交替した。すでに高麗大学校側からは、来年度以降も同種の試みを続けたいという申し出が正式になされ、Kim教授も東洋文化研究所を訪問している。同大学とは「競合関係」にあるソウル国立大学のKang Myug-ku教授（本事業での協力研究者である）と北京大学とで始めた遠隔共同授業でも、アジア間比較をより本格的に行うという提案をいただいております、韓国側の協力体制も盤石なものとなっている。

中国社会科学院社会学研究所からは、二度、日本側拠点機関との共同作業の申し出があった。一度目が、2012年8月に日本学術振興会北京事務所が主催した日中国交回復40周年を記念したシンポジウムで、二度目が、2014年の世界社会学会議・横浜大会でのパネル立ち上げだが、残念ながら、日本側拠点機関のコーディネーターの事情で、共同作業をするのは叶わなかった（すでに別のオファーをいただいていたため）。ただ、こうした申し出が積極的に出てくるようになったのは、本事業によって信頼関係が強化されたからである。

中国側のパートナーに関しては、香港大学も協力関係にあったが、本事業を通じて関係が強化されたこともあり、東京大学と香港大学が全学交換協定を結ぶこととなった。これも、本事業の思わぬ副産物である。

シンガポール国立大学に関しては、コーディネーターのTan Ern Ser教授が今年度のセミナーに参加してくれ、翌日に開かれた個別のセミナーでも話をしてくれるなど、個別にはよく対応してくれた。今後とも、日本側拠点機関からの申し出に対しては、誠実に対応してくれることが期待される。とはいえ、機関としてどれだけ今後とも継続的に共同研究に参加してくれるかとなると心もとないところがある。

### (b) 学術面の成果

年頭に掲げた目標は、ほぼ達成することができた。

別紙論文リストにあるように、勁草書房からアジア比較社会研究のフロンティア・シリーズ

ズの2巻目を刊行することができたが、これは、今まで本プログラムを通じて発表された論文の一部を翻訳・編集して論文集に編んだものである。

また、12月に行ったセミナーでは、本プログラムに参加しているカントリー・コーディネーターによる評価の結果、よい論文だと評価された3本の論文の筆者を招聘し、東京大学の多くの大学院生たちの前で模範プレゼンテーションを行った。こうした優れた論文の報告を聞くことで、後学の者は、どのような点に注意しながら論文を作成しなければならないか、文献の吟味や理論的検討とデータ分析をどのように結びつければよいのか、今までにない新しい視点から論文を作るにはどうしたらよいのか、など重要な点を学ぶことができた。セミナー終了後のレセプションでも、参加者はみな、「何がよい論文の構成要素であるかが実感できた」と言っていたが、これこそ、セミナーの意図が実現したことを示す証拠である。今後は、報告者たちの研鑽を期待し、国際的なレフリー付雑誌に投稿されることを待つだけである。

最後に、アジア比較社会共同研究会については、日本学術会議社会学専門委員会・社会理論分科会との共催で、日本社会学会年次大会でセッションを開き、3年の成果を日本社会学会の会員たちに披露した。

これらの活動を通じて、東アジアを横にらみした社会学的研究の重要性が十分に発信された。アジア・バロメーター共同研究会の総括セッションは、本プログラムの総括にもあたるものだったが、台湾のカントリー・コーディネーターであった Hsiao H.H. 教授からは、今回のプログラムは、以下で紹介する若手研究者育成ばかりか、新たな学術の開拓という点でも大成功だったという評価をいただいたが、これは本プログラムのコーディネーターの感覚と一致している。

### (c) 若手研究者育成

今年度もセミナーと研究会を通じて若手研究者の育成に意を注いだ。セミナーでは3名の若手研究者に報告を依頼し、専門家の手厳しいコメントを受けながら論文をブラッシュアップする術を学んでもらった。アジア・バロメーター共同研究会では、のべ13名が報告をし、アジア・バロメーターのデータを利用した新しい比較研究の可能性を模索した論文を発表した。これらの研究会で報告された論文については、すべて本プログラムのホームページで公開されている。

[http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/aasplatform/achievements/2012\\_ab.html](http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/aasplatform/achievements/2012_ab.html)

[http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/aasplatform/achievements/2013\\_ab.html](http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/aasplatform/achievements/2013_ab.html)

台湾のカントリー・コーディネーターであった Hsiao H.H. 教授からは、本プログラムを通じて多くの若手研究者が台湾で職を得たり、昇進していること、何より意欲的な研究が多く提出されていることから、本プログラムは若手研究者育成という点で大成功だったと評価してくれている。高麗大学の Kim 教授からも、同大学が BK21 の後継プログラムを運営するためにも本プログラムで作り上げたネットワークを利用したいと提案していたのも、本プログラムで若手研究者の育成ができたからである。

ちなみに、コーディネーターの指導学生で、アジア・バロメーター共同研究会に参加して同データセットを利用して博士論文を書いた学生(1-7の周倩)は、今年度末に博士号を取得した。

(d) その他 (社会貢献や独自の目的等)

上述のように、高麗大学校から従来のネットワークを維持した形で箇所間協定を結びたいというオファーがあったが、これは、今後の東アジア社会学者間の持続可能な交流を考える上でも、重要な申し出だった。近年、日本ばかりか韓国や台湾、中国は、「グローバル化への対応」をほぼイコールに「アメリカへの学生送り出し」と考える傾向が強いが、こうした域内の学生移動が加速すれば、今までになかった研究が生まれてくることになる。欧米のアジア研究が、強烈な「他者研究」であり、言語の壁もあって複数のアジア地域をまんべんなく比較する作業は、欧米研究者にとっては大変にむずかしい作業となる。ましてやローカル言語を学んだ上となると、ほとんど不可能に近いが、今回のプログラムの実施を通して、東アジアの域内交流を加速させることで、こうして欧米では不可能な研究アジェンダが東アジア内では可能になることを実感した。

(e) 今後の課題・問題点

アジアの比較を行っていく際の問題点は、以下の2点がある。

第一に、域内で研究者間に温度差があること。今回のプログラム運営を通じて、韓国と台湾は、こうした試みに大変敏感に反応し、研究者ばかりか学生も果敢に応募してくれる。しかし、国内に多くの問題を抱え、もともとアジアに関心をもつものが少ない中国（中国は大国研究や戦略研究にエネルギーを注ぎがちで、地域研究が地歩を得ていない）や、アジアの比較研究には関心をもつものの、これはアジアからの留学生に限られる日本では、こうした作業は進めにくい。日本と中国といった「アジアの大国」で、今後とも同種の作業を進めていく意義は大きい。

第二に、東南アジアとの連携がむずかしい。上述のように韓国や台湾は比較に関心をもつといっても、なかなか東南アジアは射程に入らない。シンガポールの研究者は、東南アジアとの比較を行うものの、東アジアと比較するメンタリティが弱い。また、学生を動員して新しい研究を切り開こうとする意欲が弱く、概して英米の「飛び地」的な研究を指向する傾向が強い。そのため、シンガポールを含む東南アジアを、いかにネットワークの中に組み込むかは、これからも大切かつ困難な作業となるだろう。

(f) 本研究交流事業により発表された論文

平成24年度論文総数                      25本



## 6. 研究成果の公開・発信事業

### 1) センターホームページの更新・運営

その時々イベントや成果について、センターのホームページで紹介した (<http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>)。

具体的には、「共同利用・共同研究拠点事業」については、平成 22・23 年度に公募プロジェクトとして採択された「アジアの工芸の<現在> 工芸の人類学の基礎研究」(申請者：神戸大学 窪田幸子)「国際的な米価高騰とインドシナ半島の稲作の変容に関する農業経済史」(申請者：東京外国語大学 宮田敏之) の 2 件について成果報告書を公開した。

### 2) 出版

ニューズレター『明日の東洋学』は第 28～29 号を刊行した。全てのバックナンバーの PDF ファイルをホームページ上 (<http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/pub/newsletter.html>) で配布している。

東洋学研究情報センター叢刊は第 15 輯「東京大学東洋文化研究所所蔵 社団法人日本ネパール協会旧蔵資料目録」、第 16 輯「リスクの中の東アジア アジア比較社会研究のフロンティアⅡ」を刊行し、関連機関への配布を行った。

### 3) アジア研究情報 Gateway

日本国内におけるアジア研究の動向として、若手アジア研究者の研究情報を 2003 年度からセンターホームページ上で紹介している。今年度は「植民地官僚」研究の現在——英領インドの「パンジャブ学派」を巡って(執筆者：清泉女子大学 非常勤講師・三瀬 利之)、「ベトナムの教育の舞台裏：フォーマル課程からの脱落と再挑戦」(執筆者：東京大学大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻 博士課程・勢村かおり) を掲載した。

## 7. 研修事業

### 1) 漢籍整理長期研修

平成24年度は6月4日～9月7日に実施し、8名が受講した。6月4日～8日の1週間は人文社会系研究科文化資源学専攻の授業を兼ねており、本学の学生1名が受講した。

### 平成24年度漢籍整理長期研修 日程・課目・講師

日 程	時 間	課 目		講 師	備 考
6月4日(月)	9:30～ 17:00	開講式(9:30～10:00) オリエンテーション 漢籍版本目録概説 (10:00～17:00)	講義	大 木 康 (東洋学研究情報センター長)	
6月5日(火)	9:00～ 17:00	四部分類について	講義	井 波 陵 一 (京都大学教授)	
6月6日(水)	9:00～ 17:00	漢籍整理実習 (1)	実習	陳 捷 (国文学研究資料館准教授)	
6月7日(木)	9:00～ 17:00	漢籍整理実習 (2)	実習	陳 捷 (国文学研究資料館准教授)	
6月8日(金)	9:00～ 17:00	朝鮮本について	講義	藤 本 幸 夫 (富山大学名誉教授)	
6月11日 ～8月31日		所属図書館所蔵漢籍整理及び研究	自習		
9月3日(月)	9:00～ 17:00	東洋文庫について (見学を含む)	講義	會 谷 佳 光 (東洋文庫図書部閲覧複写課長)	東洋文庫見学を含む
9月4日(火)	9:00～ 17:00	和刻本について	講義	長 澤 孝 三 (元国立公文書館内閣文庫長)	
9月5日(水)	9:00～ 17:00	漢籍データベースの利 用と構築	講義	安 岡 孝 一 (京都大学准教授)	
9月6日(木)	9:00～ 17:00	漢籍補修法	講義	細井歌寿男、青池香名子 (宮内庁書陵部)	
9月7日(金)	9:00～ 16:30	漢籍整理実習 (3)	実習	高 橋 智 (慶應義塾大学教授)	
	16:30～ 17:00	修了式		大 木 康 (東洋学研究情報センター長)	

#### 平成24年度漢籍整理長期研修研修員所属先一覧

1. 東京大学総合図書館
2. 東京大学教養学部等図書課
3. 東京大学東洋文化研究所図書室
4. 東北大学附属図書館
5. 筑波大学附属図書館
6. 一橋大学附属図書館
7. 国立国会図書館
8. 龍谷大学図書館

#### 8. その他

- 1) 平成25年2月1日(金)に京都大学人文科学研究所会議室にて、全国文献・情報センター長会議および人文社会科学学術情報セミナーが開かれ、4センターの事業報告、センター長会議の今後について議論した。
- 2) センター機関推進プロジェクトの成果についてのヒアリングを行い、その結果を25年度の予算編成の際に反映させることとした。